鳥取県立図書館蔵『やつれ蓑の日記』解題・翻刻

岡　野　幸　夫

Yukio OKANO : The Bibliography and Transliteration of "Yatsure-mino no Nikki" owned by Tottori Prefectural Library

鳥取県立図書館蔵『やつれ蓑の日記』についての調査を報告し、あわせて本文を翻刻した。

キーワード：衣川長秋　やつれ蓑の日記　雨瀧記行　美徳山記行　翻刻

はじめに

去る平成二一年三月二六日、鳥取県立図書館にて、鳥取藩国学教授・衣川長秋著『やつれ蓑の日記』を実見する機会を得たので、その概要を報告するとともに、翻刻本文を提供する。貴重な文献の閲覧と翻刻本文の公開を許可いただいた鳥取県立図書館に深謝申し上げる。

本書については、津本（二〇〇七）において翻刻本文が公にされているが、不審な箇所（誤脱か）がまま見られる。同書では九曜文庫蔵の版本（文政四年序文）を底本とするが、解題によるかぎり、鳥取県立図書館蔵本と同一本文をもつ版本と見なして差し支えないようである。そのため、今回改めて原本を検し、翻刻することとした。

鳥取県立図書館には、版本二、写本一、都合三本の『やつれ蓑の日記』が蔵されている。本稿では版本（甲）、版本（乙）、写本と仮称する。書誌的事項の詳細は次節で述べるが、版本（甲）（乙）は同一版によるもの、写本は版本（甲）を忠実に模写したものと思しい。同館には、本稿で翻刻する版本（甲）を複製したもの、および翻刻本文（いずれも同館によるもの）も蔵されている。また、因幡史学談話会による『鳥取史学』第二六号に「雨瀧記行」の翻刻が掲載されている由である（これについては未見）。

なお、本文の内容に関する事柄（注釈・索引など）については別稿を期したい。

一、鳥取県立図書館蔵『やつれ蓑の日記』について

（一）作者

本書の作者は江戸時代後期の国学者、衣川長秋である。『鳥取県史』『国書人名辞典』によると、以下のようである（抜粋して示す）。

〔生没〕明和二（一七六五）年生、文政五（一八二二）年没。享年五八歳。

〔家系〕本居宣長の同族、池田辰三郎周令の男。のち因幡鳥取の衣川氏を嗣ぐ。

〔経歴〕伊勢の人。寛政三（一七九一）年本居宣長に入門、のち本居春庭の高弟となる。寛政一二（一八〇〇）年、京より鳥取に下向、講義を始める。以後、京と鳥取を往来するが、享和三（一八〇三）年、鳥取藩から正式に滞留を認められ、塾を開き国学和歌を教授、のち藩の国学教授となる。門人も多く、一説には三〇〇人を数えるという。文政五（一八二二）年、『田蓑の日記』『やつれ蓑の日記』出版のため上京、過労のため大阪に移るが、文政六（一八二三）年、門人中島豊足の家で客死。

衣川長秋の著作は、『補訂版 国書総目録』『国書人名辞典』によると、次のようなものがある。和歌の注釈、紀行文などである。

〔和歌の注釈〕金槐集解・新古今集渚の玉・百人一首峯の梯

〔紀行文〕雨瀧記行・田蓑の日記・美徳山記行・やつれ蓑の日記

〔語学書の注釈〕倭読要領弁

（二）成立・刊行時期

「やつれ蓑の日記」の旅行期間は文政二（一八一九）年四月一八日から同年閏四月二九日までで、「雨瀧記行」は某年九月、「美徳山記行」は文政四年三月の旅行である。紀行文という文章の性質上、いずれも、おそらく旅行後あまり時をおかずにまとめられたものであろう。『補訂版 国書総目録』でも「やつれ蓑の日記」は文政二年成立としている。

本書の刊行時期であるが、版本・写本ともに刊年が明記されていない。版本（甲）（乙）ともに、最終丁に落丁があるのかもしれない。序文（因幡国加知弥神社神主飯田秀雄）に「文政四年八月三日」とあるので、これ以降の刊行であることは間違いない。このうち、版本（甲）は文政六（一八二三）年に刊行された可能性が高い。すなわち、版本（甲）と奥書が一致する津本（二〇〇七）所収の翻刻本文には、京の書肆河南儀兵衛による文政六年の刊記が見られるのである。『補訂版 国書総目録』によると、文政六年の刊記を持つ伝本としては静嘉堂文庫本・広島大学本・龍谷大学本などがある。また、刊年不明の伝本としては国会図書館本・静嘉堂文庫本・宮内庁書寮部本などがある。

（三）内容

「やつれ蓑の日記」

文政二（一八一九）年四月一八日から同年閏四月二九日までの旅行記。鳥取を出発して、日吉津に宿り、大山に詣でる。米子に数日滞在し、源氏物語などを講説する。境港に宿り、美保神社に詣でる。出雲の清水寺に詣でた後、家族から帰宅を促す手紙が来たため帰宅する。書名は、本文の冒頭に、前年（文政元年）に出雲大社に旅行した折の蓑笠を再び取り出して旅立つ旨の記述があることに由来する。

「雨瀧記行」

某年九月二〇日から同年九月二二日までの旅行記。鳥取を出発して雨瀧の里に宿り、雨瀧を見る。翌日は石井の出湯に行く。その翌日に大田村の大神神社に詣でなどしながら、夜帰宅する。

「美徳山記行」

文政四（一八二一）年三月二六日から同年三月二七日までの旅行記。倉吉を出発して三朝に到り、三徳山に登る。下山後三朝温泉に宿る。翌日倭文神社に詣でて、夜倉吉に戻る。

（四）　書誌的事項

①版本（甲）（請求記号950／4／郷土WH）

版本一冊、江戸時代文政六年刊カ、袋綴明朝装、紺地紙表紙・裏表紙（原表紙カ）、綴糸ハ後補、楮紙、縦二五・二センチ×横一八・〇センチ、表紙左ニ題箋（原題箋ノ上カラ貼付、「やつれみのゝ日記」墨書）、下小口ニ丸朱印（鳥取県立図書館印カ、版本（乙）、写本ト同一印）、序文第一丁表上欄外「52681」青印、序文第一丁表「鳥取県立鳥取図書館蔵書印」角朱印、「鳥取県立鳥取図書館　昭和15年4月24日　寄贈」青丸印、「案輪堂蔵書印」赤色角印（中央ニ「消」青小丸印ガ重ナル）、柱刻「〇やつれみのゝ日記序　〇一（～二）」、「やつれみのゝ日記　〇一（～十四）」、「〇附録雨瀧記行　〇一（～六）」、「〇附録美徳山記行　〇一（～七）」、一面七行（序文）、一〇行（本文）、訓点附刻（振リ仮名、濁点、句点）、「雨瀧記行」第二丁裏ノ和歌二首ニ不審紙アリ、「美徳山記行」ノ第七丁ハ欠失シテ補写シアリ、奥書「此ニ記行もこたひついてにしりにつけて板にゑらせつ（改行）秀雄（改行）衣川蔵版」墨書補写、刊記ナシ、表紙右上「950／4／郷土WH」ラベル貼付、最終丁裏上欄外「950／4」ラベル貼付、

②版本（乙）（請求記号950／4／郷土WH）

版本一冊、江戸時代文政四年八月三日序文、袋綴明朝装、紺地紙表紙・裏表紙（原表紙カ）、綴糸ハ後補、楮紙、縦二五・二センチ×横一八・〇センチ、表紙左ニ刷題箋（原題箋、甚シク虫損、「□つれみの□日記全」）、下小口「やつれみのゝ日記」墨書、下小口ニ丸朱印（鳥取県立図書館印カ、版本（甲）、写本ト同一印）、序文第一丁表上欄外「99059」青印、表紙見返裏「鳥取県立鳥取図書館　36・11・18　購入」青丸印、序文第一丁表「鳥取県立鳥取図書館蔵書印」角朱印、「梧樓主人坐右図書」角朱印、「やつれ蓑の日記」第一丁表上欄外「那珂」丸朱印、版面ノ体裁ハ版本（甲）ニ同ジ、全丁ニ亙リ間合紙ヲ挟メリ、乱丁・落丁アリ（「やつれ蓑の日記」ノ後「美徳山記行」、「雨瀧記行」ト続キ、「美徳山記行」ハ最終丁ヲ欠ク）、奥書ナシ、刊記「書林（改行）江戸日本橋通壹丁目　須原屋茂兵衛（改行）同日本橋通二丁目　山城屋佐兵衛（改行）同芝神明前　岡田屋嘉七（改行）同本石町十軒店　英大助（改行）同浅草茅町二丁目　須原屋伊八（改行）大阪南久宝寺町心斎橋南〈入　堺屋新兵衛（改行）同順慶町心斎橋南〈入　堺屋定七」、表紙右上オヨビ最終丁裏上欄外ニ版本（甲）ト同一ラベル貼付、

③写本（請求記号950／4／郷土WH）

写本一冊、江戸時代文政六年八月三日以降写カ、袋綴明朝装、白地紙表紙・裏表紙（原表紙、綴糸モ）、楮紙、縦二三・七センチ×横一七・六センチ、表紙・裏表紙ハ銀泥ニテ八角形ノ文様アリ、表紙左「やつれ蓑の日記」墨書、下小口ニ丸朱印（鳥取県立図書館印カ、版本（甲）（乙）ト同一印）、表紙見返裏「池田家寄贈」ペン書（「寄贈」及ビ枠線ハ青印）、第一丁表上欄外「60881」青印、第一丁表「鳥取県立鳥取図書館蔵書印」角朱印、奥書ナシ、表紙右上オヨビ最終丁裏ニ版本（甲）ト同一ラベル貼付、本書ハ版本（甲）ノ写本ニシテ、一丁ノ行数、改行ノ位置、字形ニ至ルマデ忠実ニ模写セル故ニ、版本ノ不鮮明ナル箇所ノ確認ニ大イニ有益タリ、

（五）　補記

①版本（甲）

「案（＝松）輪堂」は未詳。

「秀雄」は飯田秀雄。『鳥取県史』『国書人名辞典』によると、寛政三（一七九一）年生、安政六（一八五九）年没。享年六九歳。飯田信秀の次男。序文に見える國本道男は姉婿。因幡国気多郡勝宿（現鳥取市鹿野町寺内）加知弥神社の神職。衣川長秋に国学・和歌を学び、寛政八（一七九六）年従五位下。社殿改築にからむ問題の責任を負って追放され、天保三（一八三二）年和歌山に赴き本居大平に師事。同五年、帰郷。

「衣川蔵版」は、津本（二〇〇七）の翻刻によると以下のようにある。

「　衣川蔵版
　文政六年未正月発行
　京三條通寺町西へ入町
　弘所書林　河南儀兵衛　」

また、同じく衣川長秋著の『田蓑の日記』（文政五（一八二二）年刊）の刊記にも、以下に示すように「衣川蔵版」の文字が見える（石破（二〇〇六）の影印による）。

「やつれ蓑の日記　　全一冊
　衣川蔵版
文政五年午九月發行
　大坂心斎橋安堂寺南へ入
　　穐田屋太右衛門
　弘所書林　京三條通寺町西へ入町
　　河南儀兵衛　　」

おそらく、衣川長秋が自著の著作権を保有するものとして記したものであろう。

②版本（乙）

「梧樓主人坐右図書」「那珂」はいずれも那珂梧楼の印。那珂梧楼は出羽国大館（現秋田県大館市）の人。文政一〇（一八二七）年生、明治一二（一八七九）年没。享年五三歳。もと江幡氏。名は通高。弘化元（一八四四）年盛岡藩主の近習となるが翌年脱藩。江戸・京・広島をめぐり儒学を学ぶ。安政六（一八五九）年帰藩。藩校作人館創設にあたって学制改革を提案し、藩学の基礎を定めた。明治四（一八七一）年「那珂」と改姓。国文学研究資料館のウェブサイトに蔵書印の画像と簡単な解説がある。（http://www.nijl.ac.jp/~kiban-s/database/zousho/data/base/02_nakagorou_base.html）。那珂梧楼についての説明はこのサイトの記述および『国書人名辞典』を参考にした。

「乱丁アリ」とした根拠は、「雨瀧記行」の内題の前行に「附録」の一行が存することによる。「美徳山記行」の内題にはこの行がない。

③写本

「池田家」は周知のごとく鳥取藩主の家系。

（参考文献）

鳥取県編（一九八二）『鳥取県史』第五巻・近世・文化産業（鳥取県）
　第一章第二節三「衣川長秋と鳥取藩の国学・和歌」（山本嘉将氏執筆）
国書編集室編（一九八九・一九九一）『補訂版 国書総目録』全八巻・別巻一（岩波書店）
国文学研究資料館編（一九九〇）『古典籍総合目録』全三巻（岩波書店）
市古貞次他編（一九九三・一九九九）『国書人名辞典』全五巻（岩波書店）
石破洋編著（二〇〇六）『鳥取藩国学者衣川長秋『田蓑の日記』影印・翻刻と研究』（私家版）
津本信博著（二〇〇七）『江戸後期紀行文学全集』第一巻（新典社）

二、翻刻

（凡例）

・鳥取県立図書館蔵本（版本（甲））によった。
・丁の区切は改行して「（1オ）」のように記した。
・底本の改行には従わず、追い込みとしたが、日付の直前などでは改行した。
・和歌は直前で改行し、通し番号を付して二字下げて記した。
・序文については通読の便を考慮し、濁点、句読点を付した。
・本文に附刻された濁点および句点はそのまま記した。
・本文に附刻された振り仮名は「外（ホカ）」のように記した。

（序文）

（1オ）やつれみのゝ日記序

わが衣川の大人の、さいつごろ出雲の大神をがみに物したまひし旅路の日記は、学びのはらからなる國本道男がはやくこひもとめて、板になんゑらしめんとすなる。その年さはることありて、出雲の三保神社・伯耆の大神山などには

（1ウ）えまうで給はざりしを、その又のとし、ふりはへて三保神社・大神山にもまうで給ひけるに、日記も書たまひつや、ととひしかば、それも書たりとて、筒のそこよりとりいでゝ見せたまひければ、同じくは、こたびさきの日記とともに板にゑらせまほしくてこひければ、ゆるし給

（2オ）ひぬ。そも、この二記は世の人々の道の記どもとはさまかはりて、ふることのあとゞものゆゑよしを、いさゝか書つめてさとし給へれば、みやびごとのみかは、古しへ学びせんともがらの、いとよきたつきともなりなん物と、よろこばしくたふとくおぼえて、このよし

（2ウ）いささかしるすになむ。

文政四年八月三日

因幡國加知弥神社神主飯田秀雄

（やつれ蓑の日記）

（1オ）やつれ蓑の日記

文政二とせといふ年の。卯月の十日まり八日の日。伯耆国米子に物すとて。去年の秋出雲の大神をがみに。物したりしときの。田蓑菅笠を。今年の料にとて。をさめおきたりけるを。とりいでゝ見るに。いたうやつれたれど。去年のなごりと。すてがたう思ひ出られて。ぬひつゞくりて。雨ふらねど例の人めしのぶととりきてたちいづ。今度も安躬がおくりにとてきたりけれど。去年出たちに若子源太郎がいはけなくて。安躬にしたがひて。稲葉川の橋のもとまでおくりきて。わがあとおひしかんとて。なきいさちたりしに

（1ウ）うちわびにしとてこたびは物せす。いはけなきも一とせそひたればおよすけて。かねてこしらへおきければ。きゝわきてかどのとにて。こゝろよくわかれぬ。

1 五月雨に　ぬれてくちなん　こぞの秋　露にやつれし　たみのすが笠。

とよみすてゝ行。鳥名の大里の町をはなれて。千代川をわたりてよめる。

2 河の名に　立しら浪と　もろともに　千代もかよはん　いのちながらへ。

湖山村伏野村。をすぎ。内海村にきたりぬ。去年の秋はゆくさもくさも。さはる事のありて。鬼神に物せざりしを。こたびはまうでつ。此ころ疱瘡の病世

（2オ）にほびこりたれば。此わたりの老たるがうまごをおひ。わかき女

のみどり子を。いだきなどしてまうづる人おほし。をがみてよめる。おのれ此かさをやまざりければ。

3 いもがさを やまざる人は まれなるを まれなるかずに いるがかしこさ。杖突坂をこえ。母木ノ宿青屋の宿をすぎ泊ノ宿にやどりてよめる。

4 かねてより 思ひさだめて 此里に こよひとまりと やどりもとめつ。

十九日 辰の時ばかり出たつ。海べたをすぎ鵜谷の山をうちこえ。橋津。長瀬宿をすぎ由良の宿にきてかれいひ

（2ウ）くふ。去年の秋ものせしとき。夏のころより日てりつゞきて。田なつものかれなんとするに。雨いたうふりて。しばしこゝにやすらひしに。御民らのよろこびし事思ひいでゝよめる。

5 あまつ水 あふぎてまちし みたみらが つくれるとしの かひはありけり。八橋。松が谷をすぎ。赤崎にきて山崎政喜が家をとふらふ。政喜は京に物してなきほどなれど父なる人のいたくとゞめければやどりぬ。去年の秋出雲国に物せし時は。政喜をいざなひて今年もとちぎりおきしかど

6 一声も きかずきかせず 時鳥 都しまべに 立わかれつる。はいとさうゞしきわざなりや。

（3オ）廿日 暁ばかりより雨けしきばかりふり出たれど。やがてをやみければ。駅のをさにおふせて。馬とゝのへさせたるに。またいたうふり出て。海邊の道行がたかゝめればとて。あるじのしひてとゞめければ。雨はれんまでとてけふもとゞまりぬ。

廿一日 雨をやみければ立いづ。大坂宿にきて橋井何がしをとふらひけるに。外（ホカ）にものしたりとてあはざりければ。

7 旅衣 あかずもわれは 立ぞゆく 橋井の水を 手にもむすばで。とよみおきつ。御来屋宿。淀江ノ宿をすぎて日吉津にいたりて。田口老翁がもとにやどりてよめる。きりさめふれり。此わたり相見郡なりければ。

（3ウ）8 いのちあれば またもあひ見の 里にきて 老木のかげに かさやどりせり。

廿二日 大山の神の祭り廿四日なれば。祭りに物せよとしひてとゞむればとまりぬ。

廿三日 空はれわたりければ。あすは大山に物せんとて。そのいそぎす。

廿四日 つとめておきいでゝ見るに。空うちくもりて雨ふるべきけしきなれど。けふすぐしなばいつかは物せんとて。あるじをそゞのかしてしひていづ。尾高村の流水がもとに立よりけるに。こゝちそこなひたりとて。たいめんはしたれども。

（4オ）けふの御供にはえ物せずといふ。日吉津よりこゝまで一里。大山まで四里なり。こゝかしこよりのぼりくる人おほし。精進川（サウジガハ）をわたりてのぼりもてゆくに。奥田祐之。小林茂。松村清蔭。上村利訓にゆきあひたり。よべ大山にやどりて。けふ米子に物すとてしばしかたらひてわかれぬ。明日はむかひに物させんなどいへりき。鳥居の前にて牛馬の市ありて。十三国よりつどひきたるよし人いへりき。名におふ大山の広き野原も。ところせきまで人のむれつどひて。物いひかはすと。牛馬のいなゝく声ゆするばかりなり。鳥居よりいりもてゆくに。左右に昔は。四十二の僧坊ありしを。今は二十あまり残れり。

（4ウ）すなはち本社にまうでゝ見るに。智明権現とあり。峯のうへはさらなり。社のうしろにも。雪猶ふかく残れり。大山の神は大山祇命にて。本地智明権現地蔵菩薩といへり。新古今集に智縁上人。伯耆国大山に参りて。出なんとしける暁。夢に見えける哥。へ山ふかく 年ふるわれも あるものを いづちか月の いでゝ行らん。とあり。哥は例の法の師の心づから見し夢の口つきにて。さるゆゑよしあることなるべし。さて御社の

事は。考ふるに延喜式神名帳に。大神山社とありて大汝命なり。あるものに火神山とあるは。大の字を誤れるなり。今の本社の前の川の向ひの山に。地主の神の社といふあり。是大汝神

（5オ）の社なるべしと。ある人のいへるさることなるべし。こゝかしこ見めぐるに。八重桜の花所々に。さきたるを見てよめる。

9 あかず猶　あはれとぞ見る　しる人は　夏のみやまの　八重桜花。

10 のちにさく　かひはありけり　けふのこの　こゝらの人に　あかず見られて。うぐひすのこゝら鳴けるを聞て。

11 おく山は　猶春ふかく　咲匂ふ　花のこかげに　うぐひすのなく。ほとゝぎすおほかるところときけど。鳴ざりければよめる。

12 花さける　かぎりは春と　思へばや　まだおとづれぬ

（5ウ）山ほとゝぎす。

13 きえのこる　雪をかきねの　卯の花と　見つゝなかなん　山ほとゝぎす。

14 咲花に　山ほとゝぎす　うぐひすの　声こきまぜて　鳴せてしがな。まことや此山のたゝずまひは。冨士の山に似たれば世にはゝき不尽となんいへりける。見のよろしき所は。出雲国松江の大橋の上。つぎには弓の濱なり。くだりもてゆくほどましたに。日野川帯のごとくに見おろされ。出雲国三穂のさき。おきの嶋。大海の雲ゐにつゞくかぎり見わたされておもしろし。立とまりかへり見して。

（6オ）15 あし原の　国つくらしゝ　みいさをゝ　あふげは高し　大神の山。

とよみておほなくはるかにをがみまつりて。かへるさに赤松の池を見に立よる。おかみのかへりける池なりといへり。日くれて尾高村にきて。松ともさせて亥時ばかりに。田口老翁が家にかへりて。かゆなどたうべて。足つかれたればやがて打ふしぬ。

廿五日　きのふの山路のさかしきにつかれたれば。朝寝（アサイ）して日たけておきいづ。けふはそらいとよくはれたり。きのふ道にてちぎりおきしことあれば。むかひにものせんとまちわたるに。申時ばかりに田代恒親のもとよりぞむかひ

（6ウ）に人おこせたりける。打つれて立いづ。日のくれかたにからうじて。日野川のかりそめなるたな橋をわたり。夜になりて米子にきて。すなはち例の人々のやどりをとぶらひけるに。けふは山邊といふところに物してまだかへらずといふ。田代恒親がもとにきて。去年よりの物語何くれとしつゝをるに。横田朗。こゝにおのれがきたりけるよし。聞つけてとふらひきければ。おもほえす夜ふけてふしぬ。

廿六日　朝小林茂とふらひきて。昨日は清水寺ならであだしところに物して。えなんむかひには物せざりける。いざけふは清水寺より粟嶋かけて舟にて物せんといへど。林宣

（7オ）義がけふは恒親のもとに物すと聞ければ。かねてこゝにてたいめんせんと。ちぎり置し事のあれば。おのれは物せず。未ノ時ばかりに宣義とふらひきて。夕くれかたに宣義はをぢのもとにとてわかれゆく。

廿七日　例の人々故郷にかへるよしいひおこせければ。とふらはんとて道なりければ。片尾何某がもとに立よりて。やがて例の人々のやどりをとふらひて。申ノ時ばかりまで酒のみかたらひて。あめふりけれどそゞのかし出て。勝田（カンダ）といふところまでおくりにものして立わかれて。ひとり田代恒親がもとにかへりぬ。夜になりて清蔭がわかれんとせしとき。へふるさとの　いなばの

（7ウ）山の　松の名に　君まちをらん　はやかへりませ。とよめりし歌を思ひいでゝよめる。

16 故郷の　いなばの松の　ことの葉を　かへらんまでの　なぐさめにせん。

廿八日　門脇何某がもとに横田朗といきけるに。梁瀬。渡邊の何某らき

あひて夜ふくるまでかたらひてかへる。

廿九日　朝牛尾何某にたいめんす。未時ばかり。片尾。横田の何某らとふらひきて。夜になりて歌よみけり。おのれは酒にゑひすゝみて。うたゝねしけるを。人々のかへさにおどろかされてふすまにふしぬ。

（8オ）晦日　よべ人々のよめりし歌ども見けるほど。門脇。大谷の何某らとふらひく。未時ばかり備中国人小倉泰蔵。横田朗と。霞岳亭にて物がたりす。

閏四月朔日　未時ばかり霞岳亭にて。源氏物語きりつぼの巻口説す。片尾。門脇。横田の何がしらきたれり。

二日　辰ノ時ばかり門脇何某がもとにいきて。神代正語をとく。未時ばかり霞岳亭に。人々つどひて哥よみけるとき。題をとりてよめる歌ども。

卯花。

17すゞしげに　夏をへだてゝ　咲にほふ　庭のまがきの　雪の卯花。待郭公。

（8ウ）18むらさめの　ふるの神杉　こゝをせに　まてどつれなし　山ほとゝぎす。夏月。

19見るほども　なつの夜ふけて　あけがたの　月のやどりや　うき雲のそら。戌時ばかりに人々かへりぬ。

三日　朝おきてかゆたうべて。ふづくゑによりかゝり居けるに。となりの家にて朔日の夜鳥名の里。家あまたやけぬとかたる声きこゆ。くはしうとはまほしう思ひをるをりしも。横田朗とふらひ来るをまちとりて。しかくのよしかたりつげければ。朗いきてとひきゝてかへりてかたるをきけば。おのが家もやけたゝめり。猶くはしうとひきかばやと

（9オ）思へど聞べきよしなし。いかゞせんなどおもへどまづさしあたりて契りおきつるわざなれば。朗とうちつれて門脇何がしの家にいきて。例の正語をとき午時ばかりかへりぬ。故郷の事の心にかゝりて。猶くはしうきくよしもがなと思ひをるに。門脇何某来りて。深浦（フカウラ）の防人（サキモリ）石田何某のもとに。よべはゆまづかひきたりて。若桜（ワカサ）町徳栄が家のあたりより火出て。川端町（カハバタマチ）。新町（シムマチ）。二階町（ニカイマチ）かけて。鹿野町（シカノマチ）までやけたりといへりしとかたる。されば よおのが家も二階町なれば。かならずやけたりけん。おのれなきほどなれば。妻子（メコ）どもさまよひけんと。おもひやられてむねいたし。と

（9ウ）びたちぬべきこゝちす。

20すみなれし　家はほのほと　もえあがる　けふりの中に　たちまよひけん。

四日　いかにありけんとおもひをるをりしも。妻のもとよりふみおこせたり。ひらき見るにやけたりけるよし。いひおこせければよめる。

21御親すら　みほどやかえし　かぐつちの　神のあらびを　いかにかもせん。七年さきにもやけたりければ。

22ひとたびか　ふたゝびまでも　かゞひこの　神のあらびの　すべもすべなさ。とよみてふみを見もて行に。はやく

（10オ）かへりねといひおこせけれど。思ひよれる事のありければ。のどかにかへりなんと。物のたよりにいひつかはす。巳時ばかり門脇何某のもとに物す。申時ばかりに霞岳亭にて例の口説す。

五日　例の口説す。

六日　例の口説す。

七日　大同類聚方校合して。のちに例の口説す。

八日　辰ノ時ばかり例の口説して。未時ばかり霞岳亭に人々つどひて。歌よみけるついでによめる哥ども。新樹妨月。

23月にとて　こえゆく道も　くらぶ山　若葉へだつる　木々

（10ウ）の下かげ。早苗。

24 田子の手に　ひぢかきわけて　とるさなへ　秋はさかえん　八束たりほに。

九日　例の口ぜちす。

十日　林宣義伯耆国と出雲国との境なる牓示の事に物して。車尾村深田何某が家にやどりけるよし聞て。未時ばかりに物して。夜になりて来海何某がもとにやどる。

十一日　朝奥田信敬大嶋何某ら。から国人をゐて境（サカヘ）にゆく道にてあひてわかれて。勝田社の遷宮に物して夜になりて。田代恒親がもとにかへりぬ。

（11オ）十二日　三穂のさきに物せんとて。横田朗。来海。田口の何某らと。打つれて米子を立いづ。夜見（ヨミ）村。大篠津（オホシノヅ）村をすぎて境にいたりて。杉山何某のもとにやどる。米子より四里なり。

十三日　奥田信敬が境の旅宿りをとふらひて物がたりして。未時ばかりから人をゐて船にのりて。三穂のさきにゆくを。船までおくりてわかれて。杉山何某のもとにかへりぬ。

十四日　けふもそらいとよくはれわたりて浪風なぎたれば。三穂の社にまうでんとて。横田朗。田口。来海。杉山。森。里田の何某らいざなひて船にていく。境より三里なればほどなくつく。横山何某がもとにやどりて。三穂の神社にまうでゝ

（11ウ）よめる。

25 ふしがきに　かくりいまして　皇御孫の　御尾さきつかふ　神ぞかしこき。

26 いにしへの　そのあとどころ　ことぐくに　今もをつゝに　三穂の神が

き。本社のかたはらに。三穂進命の社あり。此所をとまり小路（コヂ）といへり。中浦（ナカウラ）。槻名（ツキナ）。月名ともかけり）といふ地名あり。三穂小路（ミホコヂ）といふ所に大汝命社あり。うしろのかたに大汝命のさきみたまの社あり。海ざきといふ所に少彦名命の社あり。殿崎といふ所に久延彦の社あり。そこにてよめる。

27 かしこきや　山田のそほど　今も猶　いづちもゆかじ

（12オ）あしあるかねば。客神の社といふあり。建御名方命を祭れり。

十五日　浪風なぎたれば小船にのりて。虎瀬といふ所見に行。ゆつ石むらのつき立たるさまめづらし。

十六日　あすは肥前国長崎に船出せんよし。奥田信敬のもとよりいひおこせければ。かへりことによみてつかはしける。

28 浪の音の　ひゞきのなだを　こがん日は　ぬさとりむけよ　住のえの神。

十七日　境にかへる。此所より出雲国まで八丁ばかりあり。いにしへは出雲国へつゞきて。はつかに船のかよふばかりなりしを。

（12ウ）出雲の宍道（シヽヂ）の湖より松江の海に流れ出。渡（ワタリ）。大篠津（オホシノヅ）。夜見（ヨミ）村へ出大海に流れしを。日野川より砂ながれいでゝ。年経て濱となりて境と出雲のさかひ水たゝへて今は八町ばかりへだゝれり。境の海の水底に井のあと見えけりとある人いへり。

十八日　米子に田代恒親がもとにかへりぬ。

十九日

廿日

廿一日

廿二日　例の口説す。

（13オ）廿三日　例の口ぜちして後。未時ばかりより人々つどひて。うたよみけるついでによめる歌ども。郭公未遍。

29 たちばなは　里をあまたに　にほへるを　いかでわくらん　山ほとゝぎ

す。山夏月。

30てる月の　山のこのはを　もりかねて　夏は小倉の　名こそしるけれ

廿四日　出雲の清水寺にまうでんとて。恒親にいざなはれていく。かへさに嶋田の里倉敷何某がもとにやどる。

廿五日　恒親が家にかへりけるに。故郷の家人のもとより。とみの事とてふみおこせたり。ひらき見るに家やけて後。何

（13ウ）くれと事しげゝれば。とくかへりねとあれば。明日立帰らんといそぎす。

廿六日　恒親が家をいづ。勝田（カンダ）といふところまで人々おくりきて。夕つかたわかれて日吉津にきてやどる。

廿七日　赤崎にやどる。船上山に物せんとかねてちぎりおきしかど。かへさの道いそがれて。今度も物せずなりぬ。

廿八日　青屋宿まで飯田秀雄むかひに物したりけり。いざなはれて宮長何某か家にいきてやどる。

廿九日　秀雄濱村といふ所までおくりきて。此所にてわかれてかへりぬ。家やけたりければ猶旅のこゝちなり。

（14オ）こゝかしことふらひて佐治長孝がりゆきて。家つくるまではとてやどりをりぬ。　衣川長秋

（14ウ）やつれみのゝ日記終

（雨瀧記行）

（1オ）附録　雨瀧記行

九月廿日の日山田頼久。城戸正実。石河函（フタミ）。森恒徳等ととみに思ひたちて。雨瀧（アメダキ）といふ瀧見にものしけるに。暁に家を立出て。稲羽川をわたりて見わたすに。賤があさけのけふり山に立なびきてにぎはし。

1立のぼる　けふりを見てぞ　しられける　民のかまども　とめる御代とは。山々の紅葉の朝日ににほへる色えならず。宮下（ミヤノシタ）村。麻生（アサフ）村をすぎて新井（ニヰ）村の石舩（イシブネ）といふものを見に立よる。長サ壱間ばかりはゞ三尺ばかり深サ壱尺五寸ばかりにて。はじ

（1ウ）めは。石のふた二枚ありけんさまなれど。今は一枚のみ残れり。そのかこみに石垣を築たり。こはふるき墳（ハカ）なるべし。

2年を経て　今は草むす　かばねさへ　なきあと見れば　かなしきろかも。四方の山の紅葉見もて行に。吉野といふ所にいたりて。

3さくら花　さかん春べは　いかならん　秋は紅葉を　みよしのゝ里。中河原（ナカガハラ）といふところにいたりて酒のみゐひすゝみて。人々のかほのいろは山のもみぢもけおさるゝばかりなり。瀧のもとの里は世ばなれたる所なればとて。此所（コヽ）より酒もたせて行。紅葉にきほひて行ほどに。十石（ジフコク）というところのた

（2オ）むけに。楓の紅葉したる赤きと青きと枝うちまじりて。道におほひ立るいとおかしくて。しばし木のもとに立やすらひて。

4唐錦　赤青いろの　こきまぜの　きぬ笠させる　心地こそすれ。木原（キノハラ）村をすぎて雨瀧の里にいたりぬ。雨そほふり出ければ日たかけれど。今夜は此所（コヽ）にやどらんとて。はにふの小屋なれど。新しく造れるを見たてゝ立よりて。宿をこひけるに。あるじのうべなひければ瀧見にとて出。此所（コヽ）よりは十八丁ばかりなり。田蓑菅笠とりきて行ほどに。大瀧よりこなたに箱瀧といふあり。此瀧は大瀧よりあまれる水の。石根をとめて横さまに落くるなり。其かたち箱のさましたればかく名

（2ウ）づけけんかし。

5山姫の　瀬々の白いと　ひきはへて　この箱瀧に　くりやたむらん。大瀧へと行に此あたり紅葉の。もえたらんごとく赤き中より落くる瀧あり。

こは大瀧より箱瀧におちくる水の。此所（コヽ）にてあまりて石根をとめてそゝぎ落るさま。布を引はへたる如くなれば。布引の瀧とは名づけたるなるべし。

6 紅の　にしきの中に　山姫の　おりやまぜけん　布引の瀧

7 木々の葉は　にしきなせるを　いかにして　そめずあるらん　布引の瀧。

かくて行ほどに大瀧を見つけて。谷川をわたりて十抱（トカヽヘ）ばかりなる桂の木のもとをたもとほりて。瀧のもとに

（3オ）いたりてあふぎ見るに。石根こゞしき高根より落来るさまいふもさらなり。瀧の前わたりにこもり屋とて小房のありければ。こゝにしばししりかけて。酒のみかれいひくひつゝ見るにあかずなん。

8 落瀧つ　瀧の白いと　くりかへし　見れどもあかず　瀧のしらいと。

9 見れどあかす　いはにくだけて　玉とちり　雨とふりくる　瀧つ白浪。

10 旅衣　せばき袂に　あまるまで　ひろひて行ん　瀧の白玉。日もくれなんとてやどりにかへりぬ。あるじかゆなどとゝのへいだせり。何くれと物語しつゝ。いでやいねんとてせまき

（3ウ）ところに。おしくゞまりてふしければ。うつりがもなき蝉の羽のうすきふすまとり出てきせけり。昔物語にはやうかはりて。夜中ばかりにすべり出て。うづみ火のもとにいざりよりて。しはぶきつゝ火ふきおこして。酒のむけはひにおどろかされて。いざり出て見れば正実なりけり。いでや今宵はいねがたければ。夜もすがら酒のみあかさんとて。あるじ引おこしければ。よなかともいはすよくものみ給ふかなと。あさましう思ふめり。夜のあくるをかぎりとてのみつゝをるに。やう〳〵朝がらすのねぐらをいでゝ鳴わたりければ。かゆとゝのへて立出ぬ。かのこうちきのなつかしきにはあらで。うとましき蝉の羽のうすきふす

（4オ）まをぬぎすてしを思ひ出て。

11 蝉の羽の　うすきあるじの　心さへ　かさねて猶も　うとましきかな。

石井（イハヰ）の出湯に行に銀山（ギムザム）といふ所におりぬ。むつかしき小房に立よりてやすらひけるに。あるじはなき間にて。妻子共三人居てむしろとり出て湯などもて出けり。立出て蒲生（カマフ）村をすぎ里々をへて。未の時ばかりに石井の出湯にいたりぬ。殿の湯あみし給ふときやどりまず。かりの御館あづかれる人のもとにやどりて湯あみす。

12 世の人の　病いえねと　大汝　少彦名の　つくらせりけん。やどにかへりてかゆ酒などいださせけるに。あるじの何くれ

（4ウ）と心をつくすめるさま。よべの宿りのあるじとは。やうかはりてまめ人と見えけり。足つかるれば旅衣ひも打ときてやがて打ふしぬ。つとめて湯あみして立出。大田（オホタ）村といふところに大神（オホミワノ）神社あり。延喜式にも見えたりをろがみて。

13 大神の　このさきみたま　さきはへて　さきはへませり　天つ日継は。

此あたりに嶋根の水とて清水のありけるよしかねて聞てしあれば。何所ならんととひもて行ほどに。道のかたはらの山のふもとに。井のかたちしたるを立よりて見るに。名高き嶋根の水ともいふべきさまならねば。此あたりの田人どもにとひければ。このごろのあらき水に山くづれて。井のかたちもか

（5オ）はれりといへり。

14 くみあげて　にごるばかりも　名におへる　石井の水は　あせにけるかも。七山（シチヤマ）といふところに石室あまたあり。内にいりて見るに古墳にはあらで。上世穴にすみし世のものにやあるらん。さきに西国見めぐりし時見しものにおなじさまなり。

15 石か根に　しみさびたてる　松がえに　すみけん人の　むかしとはゞや。

16 いにしへに　すみけん人は　たれとかも　わはしらねども　松はしるら

ん。此山を七山といへるは。石室のありければむろ山なりしを。室の文字の音にしち山とよびしを。後に七山と文字

（5ウ）さへ書誤れるならんかと思はる。此山をくだりて細川（ホソガハ）といふところにいたりて。かれいひくひつゝ物かたらふついでに。ふと細川氏の先祖の此所より出給ひしとかたり伝へし事。何がしの大徳は善光院より出し事ども思ひ出て。かの院にまゐりぬ。庭に梅木ありしが世にひろごりて。細川梅と名づけてもてはやせり。貝原何がしが書にも見えたり。今はかれて株ばかりくち残れり。

17梅花　その木のもとは　かれぬれど　四方にうつりて　猶にほひけり。

此所（コヽ）より濱邊に出ぬ。きのふまでは世ばなれたる山路をものせしに。けふは引かへてこまもろこしはさらなり。

（6オ）北のゐみじの国満州などいふ国まで。つゞきたる海原遠く見わたして。

18ゐみじらが　たはわざすとも　神風に　あら浪立て　ふねよせめやも。

濱づたひ二ツ山といふ所より。湯山（ユヤマ）といふところのよき道をゆく。

19あひむかひ　たつ二山　ふたゝびも　三度もわれは　あひむかひ見ん。

湯山といふところより。たねが池のみぎはをすぎ。濱坂（ハマサカ）といふ所に出て。稲羽川の邊りをとほりて。戌の時ばかりに家にかへりぬ。

衣川長秋

（美徳山記行）

（1オ）美徳山記行

柞葉の伯耆國久米郡ノ倉吉は。むかし山名氏のをりし所にて。今は因幡伯耆二国の政事（マツリゴト）あづかり申給へる。荒尾主のしるところなり。此里の長（ヲサ）辻春信。遠藤元貞は。かねてあひしれりける人にて。こたび元貞のもとに物したりける時。美徳山にものせんとて元貞をはじめ。芦村隆信。山縣良近。辻春信をいざなひて。三月の廿日まり六日の日倉吉をいづ。さとのかたはらに住吉（スミノエノ）神社ありをがみて。

1しらくもの　浪立わたる　おく山の　坂路もまもれ　すみのえの神。とよみてそこよりたゞちならぬ。小田の細道を

（1ウ）ゆき竹田川の堤をすぎて。川をわたりて大原村にいたる。此里はむかしかぬち大原真守（サネモリ）がをりし所なり。里をはなれて山のふもとに。しのぶ石といふしのぶのかたつきたるあやしき石あり。

今云しのぶなり　垣衣にはあらず　左右の山のさくらの花さかりなりければ。石の上に椎柴打敷て。しりかけてしばしやすらひて。おのも〳〵哥よみければわれも。

2ちりはてゝ　思ひかけぬを　里遠く　桜をみねの　春の山ぶみ。とよみすてゝゆく。三朝（ミサヽ）の里にいたりぬ。倉吉よりこゝまで一里半なり。此里に温泉（イデユ）三十ばかりありて。まれなるいでゆなれど。山ふかくおくまりたる所なれば。

（2オ）湯あみしに来る人もまれなり。今宵はこゝにかへりて。やどらむとちぎりおきていづ。片柴（カタシバ）といふところにてかれいひ喰てゆく。藤の花のさけりけるを見てよめる。

3行さきの　道いそがずは　よそに見て　立わかれじを　藤浪の花。坂本（サカモト）村をすぎ合谷（ガフダニ）村にいたる。此ところは河村郡にて美徳（ミトク）山のふもとなり。川そひの道をゆく。左右に山吹の花さきをゝれるを立とまりて見て。

4岩根ふむ　道をさかしみ　山ぶきの　露そふ水を　むすびつゝゆく。おそざくらのあまたさきたりければよめる。

5ひかりなき　谷にもさくら　山吹の　春のにしきと　いろ

（2ウ）はえにけり。うぐひすのこゝら鳴ければよめる。

6さくら花　にほふ山には　鶯の　ものうからざる　音をもなくかな。山にのぼりつゝ。合谷よりこゝまで十町ばかりなり。三朝（ミサヽ）よりは一里半なり。むかしは僧坊あまたありしを今ははつかに三坊残れり。輪光院の舟月僧はかねてしる人なれば。立よりてしばしやすらひて行。釈迦堂の前の谷川をわたりて猶のぼりもて行。かづら坂といふ坂にかゝる。かづらあるは木の根をとりてのぼり行ば小キ社あり。そこを過て勝手ノ社あり。巌（イハホ）の上にたちてかたへは谷にのぞきたり。そこよりのぼり行て。いはほにくさりのつきたるをとりて。か

（3オ）らうじてのぼれば子守ノ社あり。この社も勝手社と同じさましたり。勝手ノ社より此あたりまで。桜ノ花あまたさけり。此山はむかし優婆塞（ウバソク）役小角（エムノヲツヌ）がひらきしとも。また後に吉野の御嶽（ミタケ）をうつしゝとも。云伝へたりといへり。子守といふは水分（ミクマリノ）神なるを。美古母理（ミコモリ）と訛（ヨコナマ）り。後にまたこもりとあやまりて。子を守り給ふ神とせり。わが鈴屋ノ大人は吉野の水分の御霊のさちはひまして。生れ給へりしよし。菅笠日記にも見えたれば。そのおなじ神にてましませば。かしこけれどむつまじく覚え奉りて尊み拝みて。

7ふることを　学びのおやの　をしへ子も　はつごも守

（3ウ）れ　水分の神。とよみてしばしやすらひて花を見てよめる。

8みよしのを　うつす美徳（ミトコ）の　山ざくら　こゝにも花を　みくまりの神。

9みよしのゝ　そのおもかげを　うつせれば　あかずみとこの　山さくら花。そこよりのぞきといふところの巌をつたひて。鐘つき堂といふ堂の前をすぎて。馬の背牛の背といふ。いみじきいはほの上をすぎて。岩窟（イハヤ）のうちに堂あり。そこをすぎて投入堂といふ堂あり。蔵王（ザワウ）権現をまつれり此所（コヽ）まで僧坊より八町なり。堂のこなたのいはほのうへまでゆきて見わたすに。うしろはいみじきいはほの。堂の上におほひ

（4オ）かゝりて。前は千尋の谷にのぞきたれば。此堂にのぼりゆく人まれなり。おほひかゝれるいはほをあふぎ見。千尋の谷のそこを見おろすだに。まなこくらみあしふるひて。ふみども覚えぬばかりなるを。従者（ヅサ）のいつのまにのぼりけん。猿のいはほをつたひありくやうに。くるしげもなくいきてとくかへれり。良近は立もえせで。いはほのうへにはらばひをれり。へ今こそあれ　われもむかしは　男山なりしを。年おいたればさかゆく事は。あやふければゆかず。しばしやすらひて思ふに。なもたうらいだうしになにをむさぼるねがひもなき身の。心のすさみにいかでこゝまできにけんとをこがましうなむ。此堂より猶奥ノ

（4ウ）院といふ堂ありけれど。そこには行人いとまれなりといへり。行さはかづら。木の根をとり。石にすがりてのぼりたれど。かへさはいとこうじけり。かづら坂をくだるときは従者にたすけられて。からうじて坊にかへりて湯をこひければ。舟月僧酒肴もていでゝすゝめけり。たうべてやう〳〵胸のさわぐもやみて心おちゐぬ。日もくれなんいざかへらんとてまかり申して。坊を立いでゝかへり見して

10うらむなよ　みとこの坂路　さかしけば　またとちぎらぬ　山さくら花。とよみすてゝかへるさ片柴にて日くれければ。まつともさせて三朝（ミサヽ）にかへりて。湯あみしてうちふすとて。

（5オ）11旅にして　またかりそめの　草枕　むすぶこよひの　袖のつゆけさ。とよみてねにけり。

廿七日　目たくるまで朝いして。おきてかゆたうべて。きのふの山路に足いたうつかれたれど。倭文（シトリノ）神社にまうでんとそゞのかしければ。人々うべなふ物からものうかゝめり。元貞は人より足もつかれず。かねてまうでんの心なりけり。春信はけふ一日は此所に湯あみして。あそばん

の下心なゝめれど。元貞にしひてそゞのかされて。しぶ〳〵にうちつれて宿りを立いづ。やどのあるじのきのふは山のあないし。けふもおくりに物す。きのふの道の片柴といふところにきて。そこより波関越（ナンゼキゴエ）（5ウ）といふ山路をこえて。別府といふ所に来てかれいひ喰。こし方の四方の山々花はさらなり。松だになくていとさうぐ〳〵しき道なりしを。こゝにて東郷（トウガウ）の湖（ミヅウミ）見わたされて。いぶせかりし心もはれわたれり。松が崎といふところに行て船にのりて湖（ミヅウミ）をこぎゆく。湖のめぐり三里ばかりなり。宮内（ミヤウチ）村のこなたにつきてかちよりゆく。此神社は延喜式に見えたりをがみて。

12 みすまるに　あなだまはやと　うたはしく　下照姫の　神の宮ぞよ。と大前にうたひて社のほとりを見めぐれば。楓井（カツラノヰ）と云井あり。こはふるき御書（ミフミ）どもによりて。後の人のいつはりつくれるものなり。いとをこがましき事なれどかゝる事はいづ

（6オ）くにもおほかる事ぞかし。さきの道をかへりて。また船にのりてこぎゆく。沖にいでゝ四方を見わたすに。うしろに小森和泉守守方がをりし。松か崎の城の跡見え。右に吉川駿河守元春がをりし。橋津の城の跡見え。左に山田出雲守重直がをりし。羽衣石（ウエイシ）の伴城（バムジロ）の跡見え。そのあなたに南條伯耆守元續がをりし。羽衣石（ウエイシ）の本城（ホムジヤウ）の跡高く見ゆ。むかしを思ひいでゝ。

13 いにしへの　高城の山に　ものゝふの　はたこそ見えね　雲はかゝれり。

とよめり打よする浪の音もしづかにて。つゞみのおとにはまがはずめでたし。にはよくおひてにまかせてこぎゆく。時の間に牛下（ウシオロシ）といふ所につく。そこにておくりこし人にわかれ

（6ウ）てかちよりゆく。いざなひたる人々も。きのふの山路のさかしきに。いたうつかれて行がたければ。あやしきうたひものなどうたひつゝありくに。隆信かゆくりなくおかしげなる声も高らかに。いはね木根立。山さかしけばまたみとことは思はずよ。と今やうめきたるふしにてうたひければ。をかしくて皆わらひぬ。かゝる口ずさみにとかくまぎれて。夜ルになりてからうじて倉吉のさとにきて。人々にわかれて元貞の家にかへりて。酒のみかゆたうべて。

14 きぞの夜の　露はひにけり　草まくら　おなじ旅ねも　君がなさけに。

とよみてねにけり。時は文政四年といふ

（7オ）年の三月衣川の長秋しるす。

附録終

（奥書）

（7ウ）此二記行もこたひついてにしりにつけて板にゑらせつ　秀雄

衣川蔵版